

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	本誌第十六號略評：雜録
Author(s)	山口，力麿
Citation	龍南會雜誌， 1 7： 2 6 - 2 8
Issue date	1893-05-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4076">http://hdl.handle.net/2298/4076</a>
Right	

氣遣はしきは、彼の地方に在りて、中學普通教育をも終らず、都會に出る無分別者なり、幾多の失敗書生は更に此分子中に在り、中學教育を終りたる者は都會に出で、何れの學校に入るも不都合なし。當時本塾學生合して千五百余人、幼稚舎を除ては、一つの制限なく福澤翁特得の、放任主義の下に住み、玉石混淆の内に居りて、毎朝翁が米搗の音を聞き、東京灣の海風を吞吐し、月夕琅々、文明的の誦吟をなしつゝあるなり、而して他の諸學校の如く、一度の募集廣告をなさず、日々門に集る者幾人、年卒業生を出す幾百人、嗚呼盛ならずや、見て茲に至れば、福澤先生てふ偶像の、日本文明に於て、一種出色の光彩を發する、蓋玄亦偶然に非ざるを知らんか、是れ之を慶應義塾の概觀となす。

## 本誌第十六號略評

我龍南會雜誌は、誕生以來日ゝ月に健康になりて、既に十六の齡を重ねぬ、號毎に面目改まり、材料も次第に精を抜き粹を集むる様なり、此勢にて進みさらんには、行く／＼は文壇の勇將となりて、天下に高名を揚げんと、露疑ふべきかは、これ偏へに校運の隆盛に基き、職員生徒諸氏全般の盡力に由るとは云へ、委員諸氏保育の功、亦豈尠少ならんや、今より後諸氏幸に一層奮勵せよ、

十六號を讀みつゝ、胸又浮びしまゝいさなりに評判せんと思ふなり、武骨は田舎漢の常なれば、失言強ちに咎め玉ひを、

第一に内田教授の『孔夫子性行一班』有益の大文字なるは言ふ迄もなし、謹嚴の筆一字を忽がせにせず、然も縦横より大聖人の性行を發揮して一餘蘊なき所、自からは我遠湖先生の筆、蓋玄古來幾多の儒者、孔子を偶像的ニ崇拜玄、口に筆に其性行を評論玄、遂に其真相を發揮し得ざるのみか、却て活

動せる聖人をして、狹隘なる自家鑄造の模型中の人たらしめんとしたると、同年にして語るべくもあらず、教授の筆を待て、大聖の眞相始めて躍如たり、孔子をして知るあらしめば、千載の下知己を得たるの感なきを得んや○次は白河君の『竹取物語』これ實に本誌上最初の文學的評論なり、人は自ら新奇を好むの傾あり、さればよき其文章をして、拮据贅牙ならしむるも、其所論をして、先人の糟粕に過ぎざらしむるも、誰か一讀に勞を辭するものあらん、然るを況んや、新種の題目は、流暢華麗なる文字を以て解釋せらるゝ、且つ其所論は、慥かに記者が竹取物語に對する古今の考証に、涉獵したるを示し、同時に其批評眼の善く世態人情の微に透徹するを、証するに於てをや、然れども君は竹取物語を論ずるが爲めに、文學と社會人情風俗全般との關係を説くに非らずして、特別なる社會と特別なる文學と相關することを証するが爲めに、一例を竹取物語に取りたる如き觀||換言すれば、主客を顛倒したるには非るかと思はるゝふし、間々あるが如し、然れどもこれが爲め、決して竹取物語に評論に非ずと云ふに非らず、唯予の眼中奇異の觀あるが故に、一言此に及ぶ耳、兎に角此篇多少の欠點ありとするも、記者が竹取物語に對する忠實の程ころれもあるれ、竹取の翁無かし得意なるべく、色好みの皇子公達、地にも入りたき心地せらる可き、且つ又、赫夜姫には近日内月の宮より遙々下界に御下降ありて、君に御對面あるべしと、巷説取まゝなり○次は安東君の『水火風土ヲ一觀シ來ル』大体に付ては内田先生の批評あり、予復た何をう加へん、唯「ことわりや」の歌に付ては、後世歌學者の定説ありと聞さしが「小野小町モ亦天下ノ爲メニ雨ヲ乞フノ歌一首ヲ讀メリ」と爲さるゝは如何、是唯一引照に過ぎざるも、兎に角白玉の微瑕に非ずや、又君が「熊府ノ先輩古莊嘉門氏」の作として引かれし「才子從來多誤事」の詩は、予嘗て南洲遺稿中にて見當りたる様なれど、時日久しく經て慥かには記憶

しはべからず、然れども、這般の些事、畢竟云ふに足らざる耳、一塊の土芥、何ぞ能く大河の流を濁さん、泥んや、古來大家の文字、自から規矩の外に出づる多きをや、○雜誌に入れば『南洋談』の續き、中々に面白く且つ有益なり、千田君の語氣能く紙上に現はる、筆記者の勞思ひ遣らる、方今南洋を口にするもの何ぞ限らん、然れども百聞終に一見に如くざる也、身其境を蹈んでの實話と、其價値の大小、同日に於て談すべからず、我輩は本誌が一方に於て、深遠なる學說、高尚なる推理に富むと同時に、他方に於ては南洋談の如き記實的文字に、饒ならんことを願はざるを得ず、○元本校教授本田君の書翰文章暢達、詩々數百言、君が舊生徒を懷ふれ厚き、我輩實に感謝の外あらず、○中山君の『龍南會演說部土曜會ニ就テ』及び『南州手抄言志錄』何れも評なし、○サテ歩を文苑に進むれば、梧園先生の『書中根香亭山水圖』及び武藤君の『阿蘇紀行序』及び大塚君の『有終會記』續ては八首の漢詩、何れも炯爛目を奪へども、漢文學に爛はざる我、明りに容喙すべくもあらざれば、評せず、○晚霞仙の『尼法師』中々に美辭に富めし、唯單調な過ぎて興味少くかと思ふ、譬へば、菊の花を摘みて板に張りたるを見る心地す、美は美なれども、綠葉と相映するの美觀と孰れ、敢て申す、○自ら多淚生と名乗ると何人ぞや、山本君の變死、何人か之を聞て一たび落淚せざらんや、然れども常人の淚多きは乾き易し、獨其淚溢れて七十韻の新詩となし、以て滿腔の悲嘆を訴うるに至りては、記者眞に涙多しと謂ふべし、以て多淚と號するに足る、○近頃最も氣焰を吐くは雜誌の一欄なり、記者才華の迸る所、筆勢時に烈風を凌ぎ、八駿を駕す、而して其記事の精細緻密、一餘蘊なきを見ては、我輩深く記者の勞を想ひ、併せて記者其人を得たるを賀せざるを得ず、○『勅語演說』に對しては記者嘗て序あり復た贅せず、回顧一遍、妄言罪を遁るなきを見る、畢竟腹の膨るゝを恐れての所爲に外ならず、